



/特/集/
まえがき

学問の継承性と基礎科学の危機

伊藤光弘

学問の継承性と基礎科学の存続が危ぶまれている。危うくしているものの背景には、競争主義、重点主義、効率化、流動化、実利重視、規制緩和などが横たわっている。科学技術基本法の成立とその具体化の進行、大学をめぐる改変の大きなうねり（大学設置基準の緩和、いわゆる大学教養教育の大綱化、大学院重点化、専門職大学院の創設、国公立大学の法人化等の動き）がこの間あって、基礎科学の行く末が危惧されているのである。理数ばなれなどの学力問題や教育問題も深く関わっている。

ヒト、カネ、モノ、教育、制度設計などの要因により、基礎科学は、理系、文系の区別なく、振興どころか、学問の継承性がおぼつかなくなってきた。わが国の基礎科学のレベルの高さを世界に示した2009、2010年日本人ノーベル賞受賞者6氏の研究は、30年以上前の研究によるものであり、学問の継承性がままならない事態が推移するならば、日本の基礎科学は途絶えてしまいかねない。その影響は基礎科学の上に依って立つ科学・技術全般にも、さらには日本の社会・文化・教育にも広く深く及ぶことになるであろう。

さて、政府は、東日本大震災の未曾有の災禍をうけて、2011年8月に基本法に基づく科学技術基本計画を練り直し、遅ればせながらも基礎研究（注：基礎科学とは言明していない）の推進、人材育成の強化を打ち出している。「科学技術イノベーション」推進を謳った政府のこの計画が、基礎研究推進にどう本腰を入れようとしているのか見極めたい。

特集では、基礎的な学問・専門分野において、継承性と研究・教育環境に焦点をあて、危機

の実態、背景、課題について、つぶさに論じる。

滝川論文は、理科ばなれ現象に象徴される問題が多い理科教育の現状を、教員養成論や世界での探求・リスク教育などの観点から論じる。「科学を身近なものに」の合言葉のもとに実践する「ガリレオ工房」の優れた活動や科学ボランティアによる地道だが活発な取り組みを紹介する。

伊藤論文は、「忘れられた科学」と形容されて久しい数学における危機の実態と課題に、日本学術会議数理科学委員会の提言とアンケート結果に沿ってスポットをあて、あわせて今後の数学の展望にふれる。

藤井論文は、火山観測研究の危機的現状と防災について論じる。わが国の火山防災体制の一元化の提唱を、イタリア火山学の起死回生策を例証しつつ詳しく論じる。

豊川論文は、乖離状態にある法学研究と法律実践の統合というわが国法学に課せられた課題とともに、法学研究者養成の危機は法学自体の危機であるという著者の認識のもとに、法科大学院の現状と法学研究者養成の課題と展望について提言する。

安藤論文は、実用主義指向のグローバル化時代の外国語教育の現状と課題を明らかにし、大学における英語教育のあるべき姿を、著者の実践に裏打ちされた経験をもとに、理念と目的に立ち返って論じる。

総じて、どの論文においても、その分野が依拠する基盤や学問・教育のあるべき姿にまで踏み込んだ論考を展開していることを強調して、読者への本特集の紹介としたい。

（いとう・みつひろ：茨城支部、数学）